

# カルカッタにおける dal の機能について

八代 和雄

## はじめに

ここで取り上げるドル (Dal) とは、一八世紀にカルカッタを生活圏とするヒンドゥーすなわちボッドロク (Bhadralok) によって形成され、およそ一九世紀前半にかけて機能していた党派集団のことである。一八二三年に出版された社会風刺の小品『コリカタ・コモラライ』(Kalikata Kamalaya) の中で、ドルに

所属することは、ボッドロクが都市社会カルカッタで円滑に生活を営むための必要不可欠な条件として叙述されている。従って、ドルの機能とその意味を解明することは、一八二〇年代三〇年代のボッドロクの社会がいかなる性質を帯びていたかを知る上で、一つの手懸を提示するものと考ええる。

ボッドロクは、英語教育を始めとする西欧的な教育の導入等に見られる様に、イギリスによる植民地支配がもたらした西歐文化をインドで最も早く、最も積極的に摂取した集団である。西歐文化との接触は、ボッドロクに、新聞や請願によって自己の主張を言説化する西歐的な政治手法の習熟をもたらし、反面、ヒンドゥーとしての伝統的生活倫理からの逸脱の危機をももたら

した。<sup>(2)</sup> この逸脱の様相は『コリカタ・コモラライ』の中に描写されている。すなわち、一八二〇年代には、ボッドロクは、伝統的インド文化に対する自らの周縁性を自覚していたのである。ドルは、その周縁性を補償する必要性の上に機能していたと考えられる。それ故に、ここでの課題は、ドルがボッドロクの周縁性を補償するために、いかなる性質を持っていかなる役割を果たしていたかを探ることである。

## 一、都市社会の周縁性

ドルを必要とするボッドロクの周縁性は、都市社会カルカッタの二つの属性に起因する。第一に、カルカッタは、イギリス東インド会社の拠点であり、そこでの生活から経済的利益を得ようとするならば、外来文化との緊密な接触は不可避であった。このことは、前述の『コリカタ・コモラライ』の作中人物である村落在住者と都市在住者の間で交される、言葉に関する問答に端的に表現される。

ボッドロクがベンガル語に他国の言葉を混ぜて話すことを村落在住者に批判されて、都市在住者は、こう答える。

「それら（他国語の言葉——筆者、以下同）の多くが使われています。しかし、そのことによって、大きな罪には結び付きません。なぜなら、夕刻の勤行や祭式や先祖供養でそうした言葉を使えば罪となりませんが、世俗の仕事を行う為に……使うことで、なんで罪となりましょうか。また、他民族の言葉を使わなければ……どの様にして世俗の仕事が行い得ましょうか。……ある民族が支配者となった時には、その民族の多くの言葉がなじみのものとなります。特に、公務に関することで、そうした言葉が使われなければどうしようもありません。」

こうした外来語を駆使しなければ勤まらない、イギリス人の下での商業エージェントや代理徴税人の職は、ポッドロクにとって最も実入りの良い職種であった。『コリカタ・コモラライ』の作者であるボバニチョロン・ボンドッパッダーイ (Bhabanicharan Bandyopadhyaya) 自身も、一六才の時に商業エージェントとなったのを皮切りに、参事会員、最高法院判事らの個人的な商業エージェント、あるいは、東インド会社の代理徴税人として主に生計を立てていた。<sup>(5)</sup>彼の経歴は、一九世紀の初めにカルカッタに移住して、比較的富裕な生活を送ったポッドロクの経歴であろう。

最も早くからカルカッタに定住していた、卓越した経済力を持ったポッドロクの最富裕層は、外来文化との接触に経済的利益のみならず、名譽をも求めていた。たとえば、ラームドゥラル・

デー (Randural De) の息子の結婚式の日程は、初めの二日間に「イギリス人の紳士方」を招き、その後の四日間に「アラビア、ムガル、ヒンドゥーの恵まれた方々」を招く様に決められた。<sup>(6)</sup>ラダカント・デーブ (Radakanta Deb) の孫娘の結婚式の際にも、五日間のパーティーの中の三日間はイギリス人だけを招いて行われ、二日間はベンガル人が招待された。<sup>(7)</sup>また、サティー反対者の布施を受けたバラモンには、何も贈与しないことが決定された一八三一年のドゥルガー・ブージャで、<sup>(8)</sup>ダルマ・サバーの幹事の一人カリキッシェン・バハドゥル (Kalikrishna Bahadur) は、副総督を招いて歓待している。すなわち、ポッドロクの最富裕層は、名望についても二つの社会に属していたのである。

周縁性をもたらすもう一つの要因は、一八二〇年代三〇年代のカルカッタが未だ発展途上にある新興都市だったことである。人口の流入は、地縁によって規定されるころの大きい伝統的なベンガルのカースト体制をそのまま維持することを困難にしたと考えられる。

R. B. Inden は、一五〇〇年ごろから一八五〇年ごろまでを、ベンガルのカースト体制の中世とする。<sup>(10)</sup>彼によれば、中世カースト体制の一つの特色は、婚姻の適不適やそれによって生ずるジャーティ内でのランクの上下関係等を決定するカースト議会 (Samajā, Goshri) がジャーティごとに、各地に形成されたことである。ランクの上下関係を確定して、クリン達か「序列通りに宴席に就き、彼らの婚姻の結果を顕現させ」得る様にする。こ

のカースト議会の長 (Samaja-pati, Goshri-pati) の役割は、ドルポティの祭式における役割とある程度類似している。両者の地位は、世襲される点でも共通であり、また、有力なドルの後継者であったナブキッセン (Nabakrishna Bahadur) は、ゴッシュティポティであった。<sup>(11)</sup>

しかしながら、後述する様に、このカースト議会とドルとは、重要な点で相違する。ドルへの所属は生得的に決定されるのではなく、また、一般的には様々なジャーティを含んでいた。こうした相違は、都市社会カルカッタでは、地縁や細分化されたジャーティによって固定された機構は有効に機能し得ず、より流動的な枠組みの中で機能し得る何物かが必要とされたことを意味すると思われる。

## 二、ドルの機能

ドルの機能について、S.N. Mukherjee は、「カースト規定に関する全ての論争がドルポティの家で開かれた『法廷』で決着をつけられた」と述べ、ドルを裁判所とみなしている。実際に、ドルはカルカッタのヒンドゥー社会の中で司法機構として機能し得る面を持ち、しかも三〇年代には、その側面が強張されることから、彼の説を一概に否定することはできない。しかし、ムカジー自身も「もしある人が除名されたならば、その人は、……シュラーターダ、プーリヤ、結婚式などの伝統的社会的行事に招かれなくなる。……それ故、全てのポッドロロクは、ドルに所属すること

を必要と感じていた」と述べる様<sup>(12)</sup>に、ドルの本来の機能は祭式に関するものであり、裁判所としての影響力は、祭式に関する影響力より派生したと思われる。なぜならば、ドルの法廷が宣告し得る最も重い刑罰であるドルからの除名処分は、それが祭式の執行を困難にするという点に刑罰としての有効性が存するからである。以下、『コリカタ・コモラライ』を主たる史料として、右に述べた推論の根拠を示す。

まず、ドルポティがドルの成員に対して持っていた権限の性質がどの様なものであるかを見てみよう。

「ドルポティの許可なくしては、何処にも行けず、誰と話すこともできません。ドルに入る人は、入会時にドルポティのリストに自分の名前を書かねばなりません。そして、もし誰かが過失や醜聞沙汰を起こして、ドルに属する全員が召集されれば、ドルポティの下に行かねばなりません。全員の相談で決定されたことをドルポティは命じなければなりません。」<sup>(13)</sup>

ここでは、ドルポティがドルの法廷を召集することと共に、成員の交際範囲を規制する権限を持っていたことが描かれている。ここで問題とされる交際は、文字通りに誰かと話したり、何処かに行くこと全てを意味しているわけでは無論なく、祭式への出席を意味している。

「……ドルポティの方々には、各々一人づつ、御氣に入りの世話役がいる。彼らは、ドルに属するポッドロロクやバラモンのパンディットの誰ぞやがたまたま誰かと交際していれば、

ダルマ・サバーの幹事やドルポテイといった方々に告げて、罰させたり追放させたりする。しかるに世話役御本人達は、祭式を行うことでのんの罪にも問われない。その証拠に、ゴバザール (Bagabazar) 在任のシヨンプチョンドロ・バチヨスポテイ・ボッタチャルジヨ (Sambhuchandra Bachasp-ati Bhajacharya) 氏は、アシユトウシヨ (Ashutosh) 氏のドルの世話役であるが、バチヨスポテイの父の最初のシユラッタに、カリナト・ムンシ (Kalinatha Munshi) 氏のドルに属する、アムルバラ (Agorapara) 在任のキッシン・チョンドロ・ビッタブシヨ (Kishna Chandra Vid-yābhushana) 氏とポイットナト・ビタマトウ (Vaidyanātha Vidyaratna) 氏の二人を招待して迎え入れ、集会を開いた。また……カラチャンド旦那 (Kalachanda Babu) のドルに属するシャモ・トルコブシヨ (Syama Tarkabushana) 氏を招待した。……(カラチャンドは、)このことを聞いてカリナト・ムンシのドルに属する人々と集会を持つたとして自分のドルからトルコブシヨを追放した。(以下略)

すなわち、規制されるべき対象は、祭式における交際である。また、アシユトウシヨ・デーブが自分のドルを設立したことを報じた新聞記事に、

「……集った人々は全て、その方にドルポテイとしての榮譽を与えた。実際、彼らが同意したことは、デーブ氏の許可な

くしては、社会的儀礼的な行事のために、何処にもいかないだろう——ちょうどドルの流儀がそうである様に——ということだった。」<sup>(16)</sup>

とある様に、ドルの成員が誰の主催する祭式に出席すべきか否かの決定権をドルポテイに委任することは、ドルの形成にとって最も基本的な要件であったと解される。この要件と表裏一体の關係をなして、ドルは祭式執行に不可欠な役割を持っていた。

「父母のシユラッタなどの祭式をすることになればその人は、ドルポテイの下に行つて、自分の用件を報せます。そして、自分の財産で出費できる金額を伝えます。彼(ドルポテイ)は、その人が出費に応じて人を招待できる様にリストを作つてやります。自分のドルの清浄なクリン・バラモンを何人、ボンゴ・クリンを何人、学者を何人、という様に……」<sup>(17)</sup>

すなわち、ドルは、祭式の際に招待客を確保するための窓口としての機能を持っていた。誰を祭式に招待するかは、誰の祭式に招待されるかということと同様に重視され、祭式の執行によって獲得される名声は、招待客の人数とその身分、客に対する歓待の規模によって大きく左右される。それ故に、配下の成員に招待客を指定することで、ドルポテイは、成員の祭式の格式を制限することができた。このことは、キッシンチョンドロ・セト (Kishnachandra Seth) の為に行われた最初のシユラッタについで、

「カルカッタ在任の、また、他の土地在任の何人かのバラモ

ンのパンディットの出席が拒まれた。この原因は、ドル同士  
の抗争にある。そのことで、ドルポティは残念には思わな  
った。なぜならば、ドルの成員はこの様な方法で束縛されね  
ばならない。さもなければ、ドルの結束はないだろうからであ  
る。しかし、そのことで祭主は悲しむだろう。それというの  
は、全てのドルの学者方を贈物によって満足させようという  
気があり、それが達成できなかったのだから。」

と報じている記事に明示されている。このシュレーッダで、祭  
主はドルポティの権限に阻まれて、ドルの枠を越えた歓待を実行  
し損ねたわけであるが、ドルに所属していない者にとつては、こ  
の様な不満は贅沢に聞こえるだろう。ドルに所属しなければ、カ  
ルカッタにおいてまともな祭式を執行することは不可能だからで  
ある。

「この土地に住んでいて、誰かがもしドルに所属していなけ  
れば、大変困ったことになります。なんとすれば、その人が  
何かの祭式を行つても、彼の家には誰も行かず、彼もまた誰  
にも招待されません。仮りに、その祭式が支障なく行われて  
も——それというのは、様々な土地、ヴィシヌブルとかカ  
ーシーなどから来たバラモンを、カルカッタでは多勢見つけ  
ることができからなのですが——土地の人が彼の家に行か  
なければ、人々は、なんと言うでしょうか。」

ドルが持つ裁判的機能は、ここまで見てきた、ドルポティ  
の祭式に関する権限、すなわち、配下の成員が誰の招待に応じ、

誰の招待に応ずるべきではないか、誰を招待し、誰を招待すべ  
きではないかを決定する権限によって有効に發揮される。先に引用  
した記述に見られる様に、ドルの成員がヒンドゥーとしての生活  
倫理に背反した場合、ドルの法廷が召集され、有罪が確定すれば、  
ヒンドゥー社会から隔離された状態に追い込まれる。

「……ドルがあればこそ、人々のジャーティとダルマがあり  
ます。それというのは、誰かが悪いことをすれば、その人の  
家では誰も水にも触れず、その家に寄りつきもしないからで  
す。その人の親類であっても、ドルに属する人々とドルポテ  
ィの許可がなければ足を向けることはできません。こうした  
ことから、人々は気をつけて食事をし、振るまいます。こう  
してダルマは守られるのです……」

ドルからの追放が、この様な、いわばヒンドゥー社会での市民  
権を喪失した状態を招来するのは、刑の執行を命ずるドルポティ  
の手に、配下の所員と罪人との交際を停止する権限が握られてい  
たことによる。それ故に、裁判所たり得るドルの権威は、祭式の  
窓口としての機能の上に成立していたと言わなければならない。

### 三、祭式の意味

前節に見てきたドルの機能とドルポティの影響力は、祭式を、  
招待客を確保して執行することの重要性の上に成立する。ポッド  
ロロクにとつて、贈与や布施によってパンディットらのパトロン  
としての名声を得る機会であった。このことは、ポッドロロクの

祭式観に示される。

「……特に父母のシュラーツダ等の祭式では、富裕な人は皆、自分のジャーティの人々、親類縁者、プローヒタ、学者等を招いて驚くべき集会を催します。

この集会では、あるいは金の、あるいは銀の二―四の贈物の山が築かれます。

(中略) また、学者方への辞去の際の贈物は誰も聞いたことがない程です。すなわち、論理学者のパンディット方へは八〇―一〇〇の壺や口付容器、法学者のパンディット方へは三〇―五〇の口付容器、皿、籠などです。

また、シュラーツダの当日、あるいは当夜、乞食達への辞去の際の贈物が……やって来た全員に与えられています。<sup>(21)</sup>

ここに描かれるシュラーツダは、贈物の展示・招待客への贈与、乞食への布施からなっている。実際のシュラーツダを報じた当時の新聞でもこの様な描写は一般的であり、ポッドロクにとって祭式の意義が何処に在ったかを示す。たとえば、ある新聞は、一八二五年五月一日付で、ラームドゥラル・シヨルカル (Ram-dhal Sarker) の最初のシュラーツダについて、展示された贈物の様子、数千人のパンディットが招待されて、巨額の贈物を受けとったこと、多数の乞食に布施が与えられたことなどを形通りに描写したにも関わらず五月二四日付で「シュラーツダ当日の贈物と共にすばらしい集会の華々しさを特に報告したいと思ったが……

これについて記事に欠けるところがあった。」として、誰に何が贈られたかを細かく叙述している。<sup>(22)</sup>

ドルポティに見られる影響力は、こうした贈与行為によって得られる、パトロンとしての権威の延長上にある。ドルポティの資格は、

「ドルポティの意志だけでドルができるというわけではありません。多くの人が望んでできるのです。そして、尊敬すべき人々が、公平で、しかも常に敬うべき徳性が第一等の人を選んでドルポティとする様に努めます。」<sup>(23)</sup>

とある様に、社会的に認知される種類のものである。これがパンドディットらのパトロンとしての声望であることは、ドルポティの影響力を保持するために、

「ドルに属するバラモンのパンディット達に自分の家での祭式の際に、一年に大体二回多少の物を……そしてドゥルガー・プージャの際には……皿や衣服を与えなければなりません」<sup>(24)</sup>

と述べられることに示される。すなわち、ドルポティとしての声望は、贈与によって確立されたが故に、同様の方法でそれを維持しなければならぬのである。

ここにおいて明らかな様に、ポッドロクにとっての祭式は、声望つまり社会的影響力を得るための機会であり、従ってドルはそうした権威を得る為の窓口である。前節に引用した、キッシュンチョンドロ・セトのシュラーツダの祭主が「全てのドルの学者

方を贈物によって満足させよう」とし、ドルポティがこれを認めなかった理由はここにある。その様なドルの枠を越えた贈与は、ドルポティが得てきた以上の名声、影響力を祭主にもたらすことになるであろう。

さて、以上にポッドロロクにとつての祭式の意味を考察してきたが、贈与は伝統的に徳行の内に数えられており、それ自体はポッドロロクに特有な価値観ではない。ポッドロロクの社会の特色は、最富裕層の祭式に見られる、しばしば前代未聞の規模と形容される贈与や費用の大きさと、それがニュースとして詳細に報じられるだけの価値を認められたこと、すなわち、贈与による名声の獲得に対する欲求と関心の強さである。ポッドロロクは、

「何某は父親のシュラーッダでバラモン方に一〇ルピーを与えている。私は二〇ルピーを与えよう……」<sup>(25)</sup>

という具合に贈与と出費の規模を競い、その競合が贈与の規模と機会を増加させた。

「……以前に時々耳にしたところ、学者方への辞去の際の贈物は、三〇—一〇〇ルピーでした。現在では、多くのドルがあることで、銀や金の贈物の山と多くの金銭が与えられて羨望の因となっています。(中略)

……何かの祭式を行う人は、まず第一に学者方を招いています。以前には、最初のシュラーッダなどにだけ招かれて、他の安寧を祈願する祭式では、名前さえも呼ばれませんでした。……以前の傾向では、祭主らが、ドルポティの指図によって、

また、自分のダルマと名声と富裕さを誇示するために安寧を祈願する祭式に学者を招く風習はありませんでした。それが一変して、今では招待して多くの贈物をしています……」<sup>(26)</sup>

すなわち、ポッドロロクの社会では、徳行としての贈与の占める意義も増大していたと考えられる。

こうした贈与に対する熱意は、ポッドロロクが内抱する周縁性に起因すると考えられる。たとえば、本節の最初に引用した「誰も聞いたことがない程」の贈物を伴うシュラーッダの描写は、村落在住者の都市生活での伝統的倫理からの逸脱振りを指摘する問に対して、都市在住者が反論する文脈の中に、ポッドロロクの敬虔さの例証として現れている。すなわち、ポッドロロクは贈与によって自らの周縁性を補償しなければならなかったのである。

#### 四、ドルの流動性

それでは、地縁に依ることが困難な都市社会の、周縁性を補償する窓口たり得る為に、ドルはどの様な特質を持っていないければならなかったのでしょうか。

一節の後半で少々触れた様に、ドルとゴシュティとはある点で類似する。ゴシュティポティの役割の面影は、祭式で序列争いが起こった際のドルポティの調停者としての立場に見ることができると、ポッドロロクの祭式で、白檀と花束が捧げられる段になると、

「その時に大概の場合に口論が起こります。それというもの、

白檀を（最初に）捧げられるべき方は、ゴシュティポティなのですが、集会に何人かのゴシュティポティがいれば、その為口論が起るのです。そして、ドルポティがその口論を調停して上げます。まず、ゴシュティポティに白檀が捧げられると、その後列席のバラモン方に捧げられ、その後ドルポティに白檀が捧げられます。」<sup>(27)</sup>

ここに述べられているゴシュティポティは引用部分より少し後に見られる問答から、クリン・バラモンのゴシュティポティと判断し得る。<sup>(28)</sup>すなわち、ここでのドルポティは、ゴシュティポティと同じく、祭式におけるクリンの序列を決定している。こうした類似は、必ずしもドルの起源を示すものではないが、ゴシュティとドルとの間になんらかの関係があることを暗示すると思われる。

しかしながら、両者は、その構成において大きく相違する。ゴシュティが同一ジャーティによって形成されるのに対し、ドルは、「単一のジャーティから成る一つ一つのドルがある、というわけではありません。バラモン・カーヤスタ、ヴァイディアの方々のドルに属する、カマル（鍛冶屋）、クマル（壺作り）、ティリ（油榨）、マリ（庭師）、ジャカリ（野菜作り）、カジャリ（鋼細工師）、トントロバイ（織工）等のジャーティがあります。しかし、それらは、各々のジャーティごとに、食事の際には別々の集団となります。一つのジャーティからなるドルは、シュボルノボニク達のが見られるだけです。」<sup>(29)</sup>

とある様に、様々なジャーティを含んでいる。この様な構成は、ドルへの入会に際して「ドルポティのリストに自分の名前を書くことに示される様に、ドルへの所属は任意であったことによるものである。地縁と血縁に規定されるゴシュティと比較すれば、ドルは極めて入会し易い集団であったと言ひ得る。

ドルの持つ流動性は、この入会の容易さによる。ドルからの脱退は自由であり、「ドルポティに敬意を持たなくなった人は、自分の意志でドルを退去することができ」<sup>(30)</sup>たが、その自由は、実質上、脱退によって失った祭式執行の窓口を得る為の他のドルへの加入がどの程度に容易であるかによって決まる。都市化の進行によって、この容易さは増大していったと思われる。

「現在、都市には多くの人が住んでいて祭式や先祖供養が常に行われる。それによって、多数のドルが必要となった。以前、この都市の中には、二つのドルが存在しただけである。すなわち、故マハラージャ・ナブキッセン・パハドゥルのドルと、故モドンモホン・ドット (Madannohon Data) 氏のドルであって、この二つのドルには、ほとんど全ての人が所属していた。その後、徐々に都市が成長し始め、ドルも徐々に増え始めた。しかし新しく成立した全てのドルは、子集団、孫集団と言わなければならない。なぜならば、現在ドルポティである方々は、上述の二つのドルの成員の中に教えられたからである。そのことを、どのドルポティも『そんなことはない』と言って認めないだろう。しかし、どこかのドル



から脱退して自分のドルを作った人が、そういうことを行った時には、それなりの理由があったのである。すなわち、ドルボティの意見に不同意であれば、ほとんど全ての場合に分裂が生じ、貧しい人は他のドルに入り、富んだ人は自分のドルを作る。こういう具合に多くのドルができてきた。」

ここに示される様に、ドルは、都市人口の増加に伴って数を増していったと考えられる。すなわち、カルカッタで祭式を営むポッドロロクの増加と共に、祭式執行の窓口の新設が必要となっていたのである。そして、出自の多様なポッドロロクに祭式執行の窓口を提供する為には、ジャーティや地縁によって閉ざられていない集団が必要であった。ドルの特質は、これらの必要性を反映したものである。

注

- (1) ポッドロロクをどの様に規定するかは重要な問題であり、諸説の分かれる処である。この点については Bhabanicharan Bandhyopadhyay, *Kalikāta Kamalālaya*, ed. by the Ranjan Publishing House, Calcutta, 1936 (以下、K.K.と略) pp.5-6, pp. 8-9のポッドロロク像をめぐって、便宜的にはあるが、(1)カルカッタを生活圏に含み、(2)独立した商人や地主を含めて、所謂ホワイト・カラーに分類される職業によって生計を立てる、(3)ヒンダール人の、(4)ヒンダールを指す。
- (2) A. Nandy, "Sati: A Nineteenth Century Tale of Women, 'Violence and Protect'", Rammohun Roy

and the Process of Modernization in India, ed. by V. C. Joshi, Delhi, 1975, pp.171-179.

- (3) K. K. p.22.  
 (4) *ibid.* p.8.  
 (5) Bhabanicharan Bandhopādhyāya (K. K. 所収) (以下) pp.8-14.  
 (6) B. N. Bannerjee (ed), *Sanghadpoutr Sekaler Katha*, Calcutta, 1956 B. S. (以下、S. S. K.) Vol.1, P.139.  
 (7) *ibid.* p.143.  
 (8) S. S. K. Vol. 2. p.174.  
 (9) B. Ghosh (ed.), *Selections from English Periodicals of 19th century Bengal* Vol. 1. Calcutta, 1978, pp.67-8.  
 (10) R. B. Inden, *Marriage and Rank in Bengali Culture*, Chicago, 1972, pp.1-2, pp.137-138, p.140. (以下、説書全集と略す)  
 (11) N. N. Ghose, *Memoirs of Maharaja Nubkissen Bahadur*, Calcutta, 1901, p.175.  
 (12) S. N. Mukherjee, "Class, Caste and Politics in Calcutta: 1815-38", 'Elites in South Asia' ed. by E. Leach and S. N. Mukherjee, Cambridge, 1970, p.71.  
 (13) *ibid.* pp.71-72.  
 (14) K. K. p.29.  
 (15) S. S. K. Vol. 2. pp.198-199.  
 (16) S. S. K. Vol. 2. p.198.  
 (17) K. K. p.27.

(19) S. S. K. Vol. 1. pp.264-265.

(19) K. K. pp.27-30.

(20) *ibid.* p.29.

(21) *ibid.* pp.10-11.

(22) S. S. K. Vol. 1. pp.163-164.

(23) K. K. p.27.

(24) *ibid.* p.29.

(25) *ibid.* p.23.

(26) *ibid.* p.33-34.

(27) *ibid.* p.28.

(28) *ibid.* pp.31-32. には、4つのメール (meia) のクリンに娘を嫁がせた者をミシメティホティと呼ぶ、という記述がある。

このメールとは、ラルヒ・クリン・ハラモンに特有な集団で  
ある。 N. K. Dutt, Origin and growth of Caste in  
India, Calcutta, 1969, Vol. 2. pp.9-11.

(29) K. K. p.30.

(30) *ibid.*

(31) S. S. K. Vol. 2. p.198.

しかしながら、この記事が主張する様に、カルカッタの全ての  
ドルが、一八世紀後半に活躍した二人の有力なカーヤスターナブ  
キッセンとモドンモホン・ドットーのドルから分裂して形成され  
たとはいえ難い。たとえば、カルカッタの一地域であるモロンガ  
(Malanga) に代々住んでいたクリン・カーヤスター達の回想によ  
れば、付近の土地には、元来「カーヤスターのドルポティは居らず、  
私達(カーヤスター)は、ハラモンの召使いとして長い間、ハラモン  
のドルに属していた。」と云う。

*ibid.* pp.200-202.